

國學院大學学術情報リポジトリ「K-RAIN」

漱石作品の「みたようだ」「みたいだ」について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學国語研究会 公開日: 2025-06-02 キーワード: 夏目漱石, ミタヨウダとミタイダ, 彼岸過迄, 行人, 明暗 作成者: 北澤, 尚 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001708

漱石作品の「みたようだ」「みたいだ」について

北澤 尚

キーワード：夏目漱石 ミタヨウダとミタイダ 彼岸過迄 行人 明暗

1 はじめに

明治の文豪夏目漱石が小説と小品の類（以下「作品」と呼ぶ）で用いた類義表現「みたようだ」と「みたいだ」については、既に宮地幸一（1968）と田島優（2009）がその併用の実態や両表現の用法上の差異を論じている。しかし、それらの議論の細部については、いささか再考の余地があるように思われる（注1）。

そこで、本稿は屋上屋を架すことを躊躇わず、漱石の語法の特徴の一端を明らかにするために、両表現を用いる話し手の属性だけではなく、話し手・聞き手関係や会話の前後の文脈をも精査し直すことで、考察の深化を目指したい。以下、本稿では「みたようだ」「みたいだ」の具体的な諸活用形式の用例を「みたような」「みたいに」のように平仮名表記し、この二語を各々総称して取り上げる場合には「ミタヨウダ」「ミタイダ」と片仮名表記することにする。

2 使用実態

2.1 まず、漱石作品におけるミタヨウダとミタイダの使用状況を概観する（注2）。次頁の表1から、漱石の多くの作品はミタヨウダ専用であり、いわゆる修善寺の大患から晩年の『彼岸過迄』『行人』『明暗』だけにミタイダが使用されていることがわかる。この3作品だけが、ミタヨウダとミタイダを併用しているのである。

ミタヨウダは会話文だけでなく地の文でも用いられていることから「話し言葉的（口頭語的）」か「書き言葉的（文章語的）か」という観点では、中立的、汎用的であると言えるのに対して、ミタイダはそのほとんどが会話文の用例であることから、その当時から話し言葉的性格が強かったと考えられる。

表1 漱石作品のミタヨウダとミタイダの用例数

作品名（成立年）	ミタヨウダ		ミタイダ	
	地の文	会話文	地の文	会話文
吾輩は猫である（明38）	4	16		
坊っちゃん（明39）	10			
草枕（明39）		1		
二百十日（明39）		1		
野分（明40）		3		
虞美人草（明40）		10		
坑夫（明41）	3	1		
三四郎（明41）	7			
それから（明42）		5		
永日小品（明42）	2			
門（明43）	4	10		
彼岸過迄（明45）	5	9		5
行人（大1）	3	10		10
こころ（大3）	3			
道草（大4）	1	1		
明暗（大5）	6	4	1	17
合計	48	71	1	32

なお、『明暗』におけるミタイダの唯一の「地の文」での用例は、次の（1）である（下線は引用者によるものである。「／」は改行を示す。以下同様）。

- （1）「一さんは犬見たいよ」と百合子がわざわざ知らせに来た時、お延は此小さい従妹から、彼がぱくりと口を開いて上から鼻の先へ出された餅菓子に食ひ付いたという話を聞いたのであつた。／お延は微笑しながら所

謂犬見たいな男の子の談話に耳を傾けた。(明暗・七十四・漱石全集第十一卷246頁)

上の(1)の地の文の「犬見たいな男の子」が、それに先行する「犬見たいよ」という百合子の発言を受けた、語り手による引用であることは「所謂」という表現から明白である。つまり、会話からの引用であり、(1)のミタイダは典型的な地の文の用例とは言えない。

2.2 なお、参考までに、ミタヨウダとミタイダを併用する小説の会話文における、話し手の性別による用例数を調査したので、その結果を以下の表に示す。表2と表3からは、ミタヨウダもミタイダも男女ともに用いられており、際立った傾向性がないことがわかる。この結果は、原口裕(1974)の「明治二十年代の当初において、口頭語では、男女の性別を問わず、『みたいだ』の使用が一般化する趨勢にあったようである」とする見解と合致する。

表2 会話文におけるミタヨウダの使用状況

	彼岸過迄		行人		明暗		合計
	男	女	男	女	男	女	
みたようだ	0	0	0	0	0	0	0
みたように	1	1	4	0	0	0	6
みたような	3	2	3	2	2	1	13
みたようで	1	1	1	0	0	1	4
計	5	4	8	2	2	2	23

表3 会話文におけるミタイダの使用状況

	彼岸過迄		行人		明暗		合計
	男	女	男	女	男	女	
みただ	0	1	1	2	1	2	7
みたいに	1	2	2	2	1	4	12
みたいな	1	0	3	0	6	3	13
みただ	0	0	0	0	0	0	0
計	2	3	6	4	8	9	32

2.3 ちなみに、先行研究には指摘はないが、明治44年8月13日に行った大阪朝日新聞社主催の講演「道楽と職業」において、漱石が「みたいに」を使用している事実をここで紹介する。

(2) 私が演説を頼まれて即席に引受けないのは、足袋屋みたいに一寸出来合ひがないからです、(全集第十六巻396頁)

(3) 丁度田舎の呉服屋みたいに、反物を売つて居るかと思ふと傘を売つて居つたり油も売るといふ、何屋だか分らぬ万事一切を売る家といふやうなものであつたのが、(同上396頁)

この2例の存在は重い。なぜなら、漱石は、小説という虚構の会話でのみミタイダを用いただけではなく、明治末期の公共的な空間における話し言葉としても実際に使用していた可能性が高いからである。「その当時一般的になってきた「みただ」を『彼岸過迄』で使用し始めたが、最初はうまく使いこなせなかった」(田島2009: 239頁)、「「みただ」について漱石の作品を年代順に追って眺めていくと、漱石の遺著となった『明暗』においてようやくその使用法を習得したように思われる。つまり漱石にとって「みただ」は使用語ではなかった。また、初期においては理解語でもなく、徐々に学習して身につけた語のようである」(田島2009: 221~222頁)との漱石の言語習得に関する推察がはたして妥当であるか、再考する契機となるからである(注3)。

3 漱石作品のミタヨウダとミタイダの使用状況

3.1 『彼岸過迄』のミタヨウダとミタイダ

まず、『彼岸過迄』の作中人物たちはミタヨウダとミタイダのどちらを用いているのか、話し手・聞き手関係に注目して観察してみる。

表4 『彼岸過迄』のミタヨウダ（9例）とミタイダ（5例）の話し手と聞き手

（ミタヨウダを「○」、ミタイダを「◎」とする。直後の数値は用例数。）

森本→敬太郎（◎1）、千代子→松本（◎1）、須永→千代子（◎1）、松本→敬太郎（◎1・○1）、千代子→須永（◎1・○1）、敬太郎→森本（○1）、須永→敬太郎（○1）、敬太郎→須永（○1）、須永→叔母（○1）、叔母→須永（○1）、松本の妻→松本（○1）、占いの婆さん→敬太郎（○1）
--

[人物関係] 森本は、田川敬太郎（26～27歳）と同じ下宿に住んでいる年上（「三十以上」）の知人である。須永市蔵（26～27歳）は敬太郎の友人である。松本恒三（40歳位）と田口要作（「老紳士」）は須永にとって叔父にあたる。田口の娘が千代子であり、須永とは従兄妹同士で幼な馴染みである（注4）。

『彼岸過迄』におけるミタヨウダとミタイダの使い分けの基準が世代差によるものではないことは、二十代の人物以外に、松本も用いていることからわかるし、男女差でもないことは、前節の通りである。それでは、次の（4）（5）の話し手が千代子である用例を見てみよう。

（4）松本は「千代子待つて御出。今に又面白い事を教えて遣るから」と笑ひながら立ち上つた。／「厭よ又此間見たいに、西洋烟草の名なんか沢山覚えさせちや」（雨の降る日三・千代子→松本・全集第七巻187頁）

（5）今の気分では二人と浜辺まで行く努力が既に厭であつた。母は失望した様な顔をして、一所に行つて御出など云つた。僕は黙つて遠くの海上を眺めてゐた。姉妹は笑ひながら立ち上つた。／「相変らず偏窟ね貴

方は。丸で腕白小僧見たいだわ」／千代子に斯う罵しられた僕は、実際誰の目にも立派な腕白小僧として見えたらう。(須永の話十七・千代子→須永・同上253頁)

言語資料として小説類を取り上げる際、一文だけでなく先後の文脈情報をも考慮しつつ、恣意的な解釈に陥らないように心掛けなければならないのは当然であるが、(4)では、叔父の松本と千代子には心理的な隔たりはなく、くだけた冗談を言い合う仲であることを反映して、「みたいに」が用いられていると考えられる。また、(5)も齒に衣着せぬ従妹の千代子から須永への無遠慮な直言に「みたいだ」が用いられている。この(4)(5)に共通するのは、単にくだけた会話であるばかりでなく、フェイス威嚇行為(face-threatening act 略してFTA)を軽減しない表現であることである(注5)。

また、次の(6)「みたいに」にも(7)「みたいな」にも、それぞれ丁寧体とは共起されにくい俗語的な「聞きやあ」「さね」「野郎」が同一文中で用いられていることにも注目したい。

(6) 尤も貴方見たいに学のあるものが聞きやあ全く嘘のやうな話さね。(風呂の後九・森本→敬太郎・同上25頁)

(7) 美人でさへ左う^さなんだから君見たいな野郎が窮屈な取扱を受けるのは当然だと思はなくつちや不可ない。(報告十四・松本→敬太郎・同上177頁)

(8) 松本は(中略)罵しつた。／「第一あ、忙がしくしてゐちあ、頭の中に組織立つた考の出来る閑がないから駄目です。彼奴の脳と来たら、年が年中摺鉢の中で、播木に攪き廻されてる味噌見たやうなもんでね。あんまり活動し過ぎて、何の形にもならない」／敬太郎には何故此主人が田口に対して斯う^つ迄悪体を吐くのか薩張訳が分らなかつた。けれども彼の不思議に感じたのは、是程の激語を放つ主人の態度なり口調なりに、毫も毒々しい所だの、小悪らしい点だのの見えない事であつた。彼の罵しる言葉は、人を罵しつた経験を知らない様な落付を具へた彼の声を通して、敬太郎の耳に響くので、敬太郎も強く反抗する気になれなかつた。

ただし、松本は敬太郎に対して(8)ではミタヨウダも用いている。「悪体を吐く」ではインボライトであるにもかかわらず、なぜ(7)と同じようにミタイダを使用しないのか、という疑問が生じるが、「彼の罵る言葉は、人を罵りつた経験を知らない様な落ちつきを具えた彼の声」という冷静さを表したバラ言語的特徴とそれを反映した丁寧体の使用によってFTA(フェイス威嚇行為)が抑えられているため、ミタイダが選ばれなかったと解釈できる。

なお、千代子は、須永に対して、ミタイダを(5)で、ミタヨウダを次の(9)で用いている。この違いは、(9)の場面では、須永のそばに彼の母親がいたので、くだけたミタイダの使用を控えたという解釈も可能であるし、別解として、(9)の千代子の発言は、(10)のかつての須田と千代子の母との(千代子も同席していた)結婚談義という先行文脈と響き合っているという解釈も可能である。

(9)「左様^{さよう}すると丸で看護婦見た様^いね。好いわ看護婦でも、附いて来て上げるわ。何故さう云はなかつたの」(須永の話三十・千代子→須永・同上289頁)

(10)「市さんも最^{そろそろ}う徐々奥さんを探さなくつちやなりませんね。姉さんは疾うから心配してゐるやうですよ」／「好いのがあつたら母に知らして遣つて下さい」／「市さんには大人しくつて優しい、親切な看護婦見た様な女が可いでせう」／「看護婦見た様な嫁はないかつて探しても、誰も来手はあるまいな」／僕が苦笑しながら、自ら嘲ける如く斯う云つた時、今まで向ふの隅で何かしてゐた千代子が、不意に首を上げた。／「妾^{あたし}行つて上げませうか」(須永の話七・千代子の母→須永、須永→千代子の母・222頁)

3.2 『行人』のミタヨウダとミタイダ

次に『行人』の会話文のミタヨウダとミタイダの用例を、話し手・聞き手関係に注目して分類する。

表5 『行人』のミタヨウダ(10例)とミタイダ(10例)の話し手と聞き手

兄→二郎(◎1)、兄→お貞(◎1)、二郎→母(◎1)、父→岡田(◎1)、 父→盲女(◎1)、母→二郎(◎1)、嫂→二郎(◎1)、お重→岡田(◎1)、 お兼→岡田(◎1)、二郎→お重(◎1・○2)、二郎→兄(○4例)、お 重→二郎(○1)、嫂→お重(○1)、父→母(○1)、一郎→Hさん(○1)

[人物関係] 語り手である長野二郎の視点から、家族である兄の一郎(大学教授)、嫂のお直、妹のお重、父、母、下女のお貞、および、遠縁の岡田とその妻(お兼)をめぐる出来事が描かれる。

『行人』は『彼岸過迄』と異なり、同じ聞き手に対してミタヨウダとミタイダを併用する話し手は二郎だけである。二郎は家族に対してミタヨウダとミタイダとを用いているが、聞き手ごとに調べると、母には「みただ」を用い、二郎とじっくりいかない兄一郎には「みたようだ」を4例専ら用いている^(注6)。一方、妹のお重には次のように両形を併用している。なお、『行人』は親世代でもミタイダでの使用が見られ、両語についての世代間の違いはない。

- (11) 「だから私に早く嫁に行けなんて余計な事を云はないで、あなたこそ早く貴方の好きな嫂さん見た様な方をお貰ひなすつたら好いぢやありませんか」／自分は平手でお重の頭を一つ張り付けて遣りたかつた。けれども家中騒ぎ廻られるのが怖いんで、容易に手は出せなかつた。／「ぢやお前も早く兄さん見た様な学者を探して嫁に行つたら好からう」お重は此言葉を聞くや否や、急に掴み懸りかねまじき凄じい勢ひを示した。(帰つてから九・お重→二郎、二郎→お重・全集第八巻231頁)

上掲の例は兄（二郎）と妹（お重）の口論の場面である。ミタイダより改まった場面で多用されるミタヨウダと敬語とを用いることによって心理的隔たりを表現した妹の発話の直後に、文字通り「売り言葉に買い言葉」である二郎の発話が見られる。この回に続く第十回では、「自分が彼女と喧嘩をしない遠い前の事」を二郎が思い出し、妹に「訓戒でも与へるやうに云つて聞かした」、^{など} くだけた発話では「兄さん見たいに訳の解つた人が、家庭間の関係で、御前杯に心配して貰ふ必要が出て来るものか、」（232頁）のようにミタイダを用いている。

なお、話し手としてのお重、父、嫂にも両形の併用が見られる。まず、お重は、遠縁の岡田に対して「あなたの顔は将棋の駒見たいよ」（19頁）と「大変口の悪い」（19頁）、無遠慮な発言をするかと思えば、上記の（11）のように兄の二郎に対して心理的に隔てる場合にはミタヨウダを選んでいる。

次に、一郎の妻・直は、気さくな義弟である二郎には、次の（12）のように「みただ」を用いるが、自分のことをあまり好いていないらしい義妹のお重には（13）で「みたような」を用いている（注7）。

（12）「男は厭になりさへすれば二郎さん見たいに何処へでも飛んで行けるけれども、女は左右は行きませんから。」（塵労四・お直→二郎・同上323頁）

（13）「お重さんはお貞さんのよ。好いでせう。あなたも早く佐野さん見た様な方の所へ入らつしやいよ」と嫂は縫つてみた着物を裏表引繰返して見せた。其態度がお重には見せびらかしの面当の様に聞えた。早く嫁に行く先を極て、斯んなものでも縫ふ覚悟でもしろといふ謎にも取れた。何時まで小舅の地位を利用して人を苛虐めるんだといふ諷刺とも解釈された。最後に佐野さんの様な人の所へ嫁に行けと云はれたのが尤も神経に障つた。／彼女は泣きながら父の室に訴へに行つた。（帰ってから十・お直→お重・同上234頁）

一方、ミタイダを使用した会話文については、その他に、父「何だそんな朱塗りの文鎮見たいなもの。」（110頁）、母「御前見たいに暮して行けたら、

世間に苦はあるまいね」(121頁)、兄「牢屋見たいだな」(130頁)、兄「ついお貞さん見たいな優しい娘さんに云つちまったんだ。」(223頁)、父「私見たいな老朽とは違つてね」(252頁)、お兼「貴方見たいね」(25頁)や前掲の(12)のように、非丁寧体の、くだけた(informalな)発話でミタイダが用いられている点も、先述の『彼岸過迄』の特徴と近似している。

ただし、上述の(12)の「行きませんから」は丁寧体の文であり例外のように見えるが、お直は前後では「何うせ^ど妾^{わたし}が斯んな馬鹿に生れたんだから仕方ないわ。いくら何うしたつて為るやうに^な為るより外に道はないんだから。そう思つて諦らめてれば夫迄よ」と「左右ね。夫や何とも云へないわ。人間だから何時^{いつ}何んな病気に罹らないとも限らないから」のように普通体を用いている。つまり(12)は、普通体を基調とする発話に、はさまれているという事実にも注目したい。

3.3 『明暗』のミタヨウダとミタイダ

前節までと同様に、ミタヨウダとミタイダの用例を、話し手・聞き手関係に注目して分類する。

表6 『明暗』のミタヨウダ(4例)とミタイダ(17例)の話し手と聞き手

<p>お延→継子 / 下女お時 / お延の叔父 / お延の叔母 (◎1 + 1 + 1 + 2)、津田→お延 / 小林 (◎1 + 1)、小林→津田 / お延 (◎3 + 1)、百合子→継子 / お延 (◎1 + 1)、お延の叔父→お延 (◎1)、吉川夫人→津田 (◎1)、宿の女中→津田 (◎1)、乗客の爺さん→津田 (◎1)、津田の叔母→津田 (○1)、津田の叔父→津田 (○1)、お延の叔母→お延 (○1)、他に津田の内的独白 (○1)</p>

[人物関係] 津田由雄(30歳)とお延(23歳)は結婚半年ほどの夫婦であり、吉川夫妻(40数歳)は仲人である。小林は津田の旧友であり朝鮮行きの饒別を津田にせびる。お延の叔父叔母(岡本)は、お延を娘のように可愛がっている。

『彼岸過迄』『行人』と違い、『明暗』ではミタヨウダだけを用いる話し手と、ミタイダだけを用いる話し手とに判然と分かれる。同じ聞き手に両表現を用いる人物はいない。その使用状況を次の表に示す（津田のミタヨウダ1例は内的独白で用いられている）。

表7 『明暗』におけるミタヨウダとミタイダの作中人物別用例数

	津田	お延	小林	吉川 夫人	百合子	女中	乗客 爺さん	津田 叔母	津田 叔父	お延 叔母
ミタヨウダ	1							1	1	1
ミタイダ	2	6	4	1	2	1	1			

なお、地の文ではミタヨウダが6例、ミタイダが1例用いられている。表7の津田の内的独白のミタヨウダの用例は「おれは今この夢見たようなもの
の続きを辿ろうとしている。」(614頁)である(注8)。

表7のように、人物によってどちらかの形式を振り分けたかのような実態は、『彼岸過迄』と『行人』におけるミタヨウダとミタイダの使い分けが個々の発話状況や文脈に影響を受けていたことと対照的である。

(14) 「由雄さんは一体贅沢過ぎるよ」／学校を卒業してから以来の津田は叔母に始終斯う云はれ付けてゐた。自分でも亦さう信じて疑はなかつた。さうしてそれを大した悪い事のやうにも考えてゐなかつた。／「え、少し贅沢です」／「服装や食物ばかりぢやないのよ。心が派出所で贅沢に出来上つてるんだから困つていふのよ。始終御馳走はないかないかつて、きよろきよる其所いらを見廻してる人見た様で」／「ぢや贅沢所か丸で乞食ぢやありませんか」／「乞食ぢやないけれども、自然真面目さが足りない人のやうに見えるのよ。人間は好い加減な所で落ち付くと、大変見つとも好いもんだがね」(二十七・津田の叔母→津田・全集第十一巻83頁)

(15) 「大分八釜しくなつて来たね。黙つて聞いてみると、叔母甥の対話とは

思へないよ」／二人の間に斯う云つて割り込んで来た叔父は其実行司でも審判官でもなかつた。／「何だか双方敵愾心を以て云ひ合つてるやうだが、喧嘩でもしたのかい」／彼の質問は、単に質問の形式を具へた注意に過ぎなかつた。真事を相手にビー珠を転がしていた小林が偷むやうにして此方を見た。叔母も津田も一度に黙つてしまつた。叔父は遂に調停者の態度で口を開かなければならなくなつた。／「由雄、御前見たやうな今の若いものには、一寸理解出来悪いかも知れないがね、叔母さんは嘘を吐いてるんぢやないよ。知りもしない己^{おれ}の所へ来るとき、もうちやんと覚悟を極めてゐたんだからね。叔母さんは本当に来ない前から来た後と同じやうに真面目だつたのさ」(三十一・津田の叔父→津田・同上94頁)

- (16)「なに何でもないんだよ。継^{つぎ}がね、由雄さんはあゝいふ優しい好い人で、何でも延子さんのいふ通りになるんだから、今日は屹度来るに違ないつて云つた丈なんだよ」／「さう。由雄が継子さんにはそんなに頼母しく見えるの。有難いわね。お礼を云はなくつちやならないわ」／「さうしたら百合子が、そんならお姉様も由雄さん見たやうな人の所へお嫁に行くと可^いいつて云つたんでね、それをお前の前で云はれるのが恥づかしいもんだから、あゝやつて出て行つたんだよ」／「まあ」／お延は弱い感投詞を寧ろ淋しさうに投げた。(四十六・お延の叔母→お延・同上151頁)

ミタヨウダを用いる話し手は3名しかいない。(14)の津田の叔母と(15)の叔父、(16)のお延の叔母だけである。田島(2009)は、「津田の叔父と叔母は質素に暮らしており、世間慣れしていない人物である。また、お延の叔母は、叔父が社交的であるのに対し、家庭を守っている人物であり、また江戸語など汚いことばを嫌う人物として設定されている」(235頁)、「古い表現である『みたようだ』を使用している三人は垢抜けない人物である」(236頁)と述べている。いわば、話し手たちの社会的属性やその言語観に注目した分析である。

しかし、(14)も(15)も津田の叔母と叔父が、津田に苦言を呈している

場面であるので、くだけた当世風のミタイダが忌避されたと解釈することができる。また、(16)の話し手はお延の叔母ではあるが、次女の百合子から長女の継子への「お姉様も由雄さん見たような人の所へお嫁に行くといい」という発言の引用としてミタヨウダが用いられていることに注意すべきである。若い百合子自身はミタイダを用いた可能性もあるが、引用にあたって、田島氏の指摘にもあるが、百合子の母親（お延の叔母）が俗語を嫌った結果として、ミタイダからミタヨウダへ表現を替えたと考えられる。

4 おわりに一まとめと残された課題一

以上、『彼岸過迄』『行人』『明暗』に見られるミタヨウダとミタイダの用法上の差異を明らかにするために、全用例をできるだけつぶさに観察してきた。その結果、特にミタイダの使用条件として、[くだけた (informal な) 場面]、[(無遠慮さなどの) FTA を軽減しない発言]、[俗語・音訛形などとの共起]、[非丁寧体の述語] という4種の特徴を抽出することができた。もとより、この4種の特徴をすべて備えている場合にのみミタイダが用いられるわけではなく、それらの特徴の少なくとも一つが該当する場合にミタイダが使用されていると考えられる。したがって、漱石作品におけるミタイダの諸用例は概ね「家族的類似性」の関係にある。ひるがえって考えると、ミタイダの全用例が何らかの中核的な特徴を共有していることを前提とした仮説を本稿では採用していない。一方、ミタヨウダは上記の4種の特徴に反する特徴が文に含まれる場合に用いられると言ってよい。

ただし、一つ問題が残っている。上述の三作品以外の、ミタイダが皆無の作品におけるミタヨウダにはどのような特徴があるのか、という点である。それについては、『彼岸過迄』『行人』『明暗』のようなミタイダを用いるべき発話状況と作中人物が上記三作品以外の小説には存在していないので不要であったと仮定することもできるが、はたしてそうであろうか。例えば、『彼岸過迄』の直前の作品である『門』には、会話文のミタヨウダ全10例のうち8例は、お米と宗助という表面上は平凡で静かな夫婦のくつろいだ会話に用いられている。

- (17) 「さう。でも厭ねえ。殺されちや」と云つた。／「己見た様な腰弁は、殺されちや厭だが、伊藤さん見た様な人は、ハルビンへ行つて殺される方が可いんだよ」と宗助が始めて調子づいた口を利いた。(三の二・宗助→お米・全集第六卷369頁)
- (18) 御米は自分の耳と頭の慥かな事を夫に誇つた。宗助は耳と頭の慥かでない事を幸福とした。／「さう仰しやるけれど、是が坂井さんでなくつて、うち宅で御覧なさい。貴方見た様にぐうぐう寝て入らしつたら困るぢやないの」と御米が宗助を遣り込めた。／「なに、宅なんぞへ這入る氣遣はないから大丈夫だ」と宗助も口の減らない返事をした。(七の五・お米→宗助・同上442頁)

上の (17) (18) においてミタイダが使用されていてもなんら不思議ではない。当時の漱石の言語意識を推察することは控えたいが、修善寺の大患以前には、その後のミタヨウダとミタイダの両語が対立し合いながら占める領域をミタヨウダ一語が占有していたと考えられる。

最後に。ミタヨウダとミタイダの、《比況》《例示》《推定》《婉曲》などの意味の観点からの分析は、既に杉浦滋子 (2012) で試みられていることから、本稿では行っていない。ただし、その論考ではごく少数の漱石作品を対象としており、包括的な考察は今後の課題である。

注

- (注1) 宮地 (1968) は本格的にミタヨウダとミタイダを取り上げた先駆的な論文である。明治期の使用状況を概観しつつ、漱石の全小説の傾向性も明らかにしている。「～みたいだ」は「～みたやうだ」より、「ずっとくだけた語調のこぼれである」と説く。さらに、「～みたいだ」は「若い年齢層の物言いに登場する」とも説く。原口 (1974) は、宮地氏とは異なる文献資料も駆使して、「明治二十年代の当初において、すでに、口頭語では、男女の性別を問わず、「みたいだ」の使用が一般化する趨勢にあった」と指摘している。田島 (2009) については本文中で紹介する。なお、漱石以後の作家については高橋良久氏の一連の論考があり、貴重である。
- (注2) 「会話文」には作中人物の独話及び内的意識の表出を含めたが、章節全体が一人称

- の語りである場合は地の文の用例とした。『明暗』には津田の内的独白にミタヨウダを用いた例が1例ある。なお、田島優（2009：224頁）と照合したが、『永日小品』のミタヨウダは全1例ではなく全2例である。漱石作品の本文引用は『漱石全集』（岩波書店1993～1994刊）に拠り、振り仮名は適宜消去し、旧漢字から現行の字体へ改めた。
- (注3) 無論、今日、読むことができるのは、講演内容の速記を忠実に再現した資料ではなく、後に漱石自身が加筆修正を施した『朝日講演集』（明治44年11月・朝日新聞合資会社刊）及び『社会と自分』（大正2年・実業之日本社刊）所収の本文である。なお、明治38年8月の『神泉』創刊号「本郷座金色夜叉」の合評（座談）にも「河合は元の死んだ朝顔の女の形みたいたなのもので、」（全集第25巻 125頁）という、漱石がミタイダを用いた発言がある。ただし発言を忠実に写し取っているかは断定できない。
- (注4) 作中人物の人間関係については、三好行雄編（1990）の「漱石作中人物事典」（中島国彦執筆）を参考にした。
- (注5) B&L（1987）のポライトネス理論に基づく。FTAを行うにしてもその軽減措置として、positive politeness か negative politeness のストラテジーを行うことがあるが、（4）（5）の千代子が行っていない。
- (注6) 二郎の一郎に対する態度は、「自分は今日迄ただ兄の正面ばかり見て、遠慮したり気兼ねしたり、時によっては恐れ入ったりしてゐた」（兄四十三・203頁）と語られている。
- (注7) 「お重は明らかに嫂を嫌つてゐた。」（帰ってから十・232頁）という叙述も見られる。
- (注8) 主要な作中人物同士ではないが、電車の乗客同士の会話にもミタイダが用いられている。次の例である。「だが旅行も近頃は便利になりましたね。何処へ行くにも身体一つ動かせば沢山なんですから、有難い訳さ。ことに此方こちうほう徒等とらどうらう見たいな氣の早いものにはお誂向だあね。今度だつて荷物なんか何にも持つて来やしませんや、此合切袋とこの大将のあの鞆を差し引くと、残るのは命ばかりといひたい位のものだ。ねえ大将」（608頁）

参考文献（五十音順）

- 石原千秋（2017）『漱石と日本の近代（上）（下）』新潮社
- 小森陽一（2020）『漱石深読』翰林書房
- 杉浦滋子（2012）「『～みただ』文化化の過程」『言語と文明』10
- 高橋良久（2014）「有島武郎・有島生馬・里見弴の『みたようだ』『みただ』（資料）『愛知文教大学論叢』第17巻
- 高橋良久（2015）「有島武郎・有島生馬・里見弴の『みたようだ』『みただ』」『愛知文教大学論叢』第18巻

- 高橋良久 (2016) 「野上弥生子・岡本かの子・網野菊の『みたようだ』『みたいだ』」『愛知
文教大学比較文化研究』第14号
- 高橋良久 (2016) 「『みたいだ』覚書 2016年」『愛知文教大学論叢』第19巻
- 田島 優 (2009) 『漱石と近代日本語』翰林書房
- 原口 裕 (1974) 「『みたやうだ』から『みたいだ』へ」『静岡女子大学 国文研究』7号
- 平岡敏夫ほか編 (2000) 『夏目漱石事典』勉誠出版
- 福田一雄 (2013) 『対人関係の言語学 ポライトネスからの眺め』開拓社
- 宮地幸一 (1968) 「『～みたやうだ』から『～みたいだ』への漸移相」『東京学芸大学 国
語国文学』3号
- 三好行雄編 (1990) 『夏目漱石事典』學燈社
- 吉田金彦 (1971) 『現代語助動詞の史的研究』明治書院

Penelope Brown & Stephen Levinson (1987) *Politeness: Some Universals in Language
Usage*. Cambridge University Press。(本文中では、「B&L (1987)」と略称。) 田中
典子監訳 (2011) 『ポライトネス 言語使用における、ある普遍現象』研究社